

氏 名 虞 雪健

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第 2469 号

学位授与の日付 2024 年 3 月 22 日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 日本古典文学における中国夢遊物語のアダプテーション

論文審査委員 主 査 伊東 貴之
国際日本研究コース 教授
戦 暁梅
国際日本研究コース 教授
荒木 浩
国際日本研究コース 教授
入口 敦志
日本文学研究コース 教授
中尾 薫
大阪大学 大学院人文学研究科 准教授

博士論文の要旨

氏名： 虞 雪健

論文題目： 日本古典文学における中国夢遊物語のアダプテーション

本論文では、「一つの夢が物語全体の骨格を形作り、夢中の世界を遊び回ることを夢見ること語るテキスト」を「夢遊物語」と称し、唐代伝奇の中で特に注目される『枕中記』『南柯太守伝』『櫻桃青衣』を三大夢遊物語と分類する。そして、それらの夢遊物語が日本古典文学において、どのように原作から離れ、多様に増殖され、さまざまなジャンルやメディアで創造的に再構築され、断片的に商品化・消費化されるというアダプテーションの過程を詳細に分析する。

第一章では、「夢・夢文化と夢文学・夢遊物語」に焦点を当てる。まず、近代の夢研究の歴史について概観した後、この研究から一線を画す日中における夢文化・夢文学の研究に焦点を当てた、集大成とも言える著書や、最近の研究動向などについて紹介する。さらに、本論文で取り扱う「夢遊物語」の定義を先行研究の夢物語の定義と分類を確認した上で行う。最後に、「夢遊物語」で特に注目される『枕中記』『南柯太守伝』『櫻桃青衣』を三大夢遊物語と分類し、それぞれ中国、朝鮮、ベトナムにおいてどのように広まったかについて論じる。その上で、日本における三大夢遊物語のアダプテーション作品の様相を包括的に紹介する。

第二章では、軍記物語『太平記』巻二十六「自伊勢進宝劔事付黄梁夢事」を取り上げ、引用故事「黄梁夢事」を考察する。この章では、まず「黄梁夢事」と「宝劔進奏事」に関する評釈書を参照しながら、典拠の特定が難しい点や、宝劔の真偽に関する議論の限界について検討する。そして、「瑞物」と「瑞夢」の二つのテーマに分けて考察し、巻二十六における虚構という視点から、「瑞夢」は「瑞物」を神器化する手段であることを明らかにする。それから、特定の意味を持つ日数に基づいて、「宝劔進奏劇」が貞和改元以降に計画され、後に起こる崇光帝の即位や政治危機に対処するために積極的に利用されたという、物語の構造を究明する。さらに、中国の黄梁夢の故事が、楚国と洞庭を中心とする『太平記』の黄梁夢事に変容し、夢の空間が平安京の空間と唐土への想像の投影と重なり合いながら、君主の洞庭遊船は煬帝の江都遊船と同様に、「天位五十年」の楽しみがついに「舟中の歌笑」という亡国の音が響き渡るうちに尽きることを暗示する、「黄梁夢事」の方向性を論証する。最後に、『沙石集』の「依和光之方便止妄念事」に記された若僧の夢物語が『太平記』の「黄梁夢事」の筋の発想の一端となる可能性を言及する。

第三章では、「夢中の四季の舞——舞い踊る「邯鄲」——」をテーマとし、まず謡曲「邯鄲」を中心に、謡本の異同を再確認した後、いくつかの重要な詞章上の問題に焦点を当てて分析する。これにより、謡曲「邯鄲」は「始皇帝・咸陽宮・威嚴を尽くせる即位」「（穆王、慈童）・菊水・泰平をことほぐ酒宴」「玄宗・霓裳羽衣・歓楽を極める歌舞」という、帝王が求める三つの究極的な栄華の象徴的な場面によって構築され、治世の泰平をたたえ、その永久をことほぐ喜びに満ちた劇的な夢であることを論じる。そして、能「邯鄲」の「夢

中の四季の舞」が、歌舞伎や人形浄瑠璃に与えた影響について言及し、変化舞踊の確立とともに、断片化してアダプテーションされてできた「邯鄲の夢の四季の踊り」の構造を中心に組み合わせられた踊りが、夢の構造や盧生の登場の有無によって、能「邯鄲」本来のイメージの濃厚と希薄の反復を見せながら、立役から女方への完全移行のなかで、女性の盧生の踊る姿が鮮明に浮かび上がってきたことを、番付や絵尽くし、正本などを用いて考察する。最後に、付論として、女盧生の登場を、古典の変奏である「やつし」と「見立」という視点から検討し、浮世絵における女盧生の問題とも関連づけて議論する。

第四章では、「出版流通にともなう夢遊物語」をテーマとし、出版流通と俗文芸創作が相互に刺激し合う近世において、仮名草子や浮世草子では、中国の夢遊物語はどのような様相を呈していたかを、いくつかの注目すべきテキストを取り上げて紹介する。まず、『南柯太守伝』とその影響を受けた作品が近世において怪異小説として広まっていたことを、林羅山の『恠談』の度重なる版行や、浮世草子『和漢乗合船』巻一の二「小造夢^附信州月 美濃国守 槐安国^附南柯郡楽 盤龍岡」などの作品を通じて説明する。そして、怪異小説として理解された「南柯の夢」が、動物寓話を多く含む『莊子』と関連づけられ、日本の動物寓意譚と融合されることを、『恠談御伽桜』巻二の第二「津国蛙合戦」や、『小さかづき』の冒頭記事「夢物がたりの事」を通じて論証する。さらに、近世の出版の発展により、中国夢遊物語が、先行する草子文学とともに新たな草子文学の創作にも取り込まれたことを、『小さかづき』の巻二の第四話「風露先聖、蟻穴に入事」や『杉楊枝』の巻六第二「竹斎夢想^付臨終の辞世」を通じて分析する。最後に、浮世草子では、『勸進能舞台桜』『風流勸進能』のように、謡曲への嗜好を端的に示した作品や、『遊眼嘶不老時宗』『一角仙人四季桜』のように、邯鄲の夢の語りの構造を用いながらも、一段丸ごと邯鄲の夢の内容を忠実にやつした作品などを紹介する。

第五章では、「「夢遊」趣向の草双紙の五十年」をテーマとし、黄表紙以前の二七五五年から一七七五年までの二十年間と、『金々先生栄花夢』（一七七五年）以降の三十年間という二つの時期に分けて考察する。第一時期では、まず黒本、青本、絵本を中心に、既に先行研究で取り上げられた作品について再確認と修正を行い、触れられていない作品については初歩的な調査と分類を行う。特に、黒本『初夢かんたん枕』を取り上げ、「邯鄲の夢」の故事の受容と、江戸時代の対「異国」観やそのイメージの変容について論じる。また、富川吟雪の「夢遊」趣向にも注目し、黒本『浮世楽助一盃夢』、青本『風流邯鄲 浮世栄花枕』、青本『風流仙人花聳』に関する先行研究をもとに、さらなる分析と批評を行う。特に、青本『風流仙人花聳』が、夢の語り構造があるにもかかわらず、実際には浮世草子『風俗遊仙窟』を素材に創作された「遊仙窟物」であることを論証する。第二時期では、『金々先生栄花夢』によって切り拓かれた『栄花夢』の模倣の風潮を概観する。そして、第三章で論じた「邯鄲の四季の舞」が黄表紙においてどのようにアダプテーションされたかを紹介する。最後に、「浦島物」や竜宮に関連する民間伝説などが、「邯鄲の夢」とどのように結びついたかを、いくつかの黄表紙作品を通じて論証する。

終章では、各章の内容を振り返り、簡潔にまとめる。そして、特に中小型類書や詩註などの漢文学の受容が、より高度な自由度と創造性を許容する基盤を提供した点、および異なる時期のアダプテーションが影響し合い、進化してきた事実など、アダプテーションの観点から明らかにした点を論述する。最後に、研究の限界と今後の課題を提示する。

博士論文審査結果

Name in Full
氏名 虞 雪健

Title
論文題目 日本古典文学における中国夢遊物語のアダプテーション

本論文は、「一つの夢が物語全体の骨格を構築し、夢中の世界を自由に遊び回ることを描いた」作品群を「夢遊物語」と定義し、それが、中国から東アジア、そして日本へと展開する中で、如何に原作から離れて「多様に増殖され、さまざまなジャンルやメディアで創造的に再構築され、断片的に商品化・消費化されるかという、アダプテーションの過程を詳細に分析」しようとしたものである。論じる対象は、中国、朝鮮、ベトナムという広がりをつまえて、日本の中世から近世の文芸、芸能、絵画への表象に及ぶ。精緻な文献学的調査に立脚しながら、夢文化の諸相を、多角的に論じたものである。全五章からなるが、序章を前置して本論を俯瞰し、終章で統括して、本論文の意義と今後の可能性、また課題にも言及する。

第一章「夢・夢文化と夢物語・夢遊物語」は、近現代の夢研究について、科学的・心理学的分析の概観と通覧を行った上で、中国と日本との、それぞれの夢文化の研究を総括し、日中の歴史的研究状況を確認する。そして「夢遊物語」の世界と内実を概観し、「三大夢遊物語」である『枕中記』（邯鄲で盧生が見た黄梁一炊の夢を描く、本論において最も重要な作品）、『南柯太守伝』、『桜桃青衣』の特徴を、それぞれ「枕の中の世界」、「蟻の国を通う」、「講筵での夢」と名付けて、その詳細を考察する。さらに中国・ベトナム・韓国・日本における「三大夢遊物語」の多様な流布と展開を丁寧に追跡して分析する。その解析は、本論の第二章以下に展開する「夢遊物語」の日本におけるアダプテーションの歴史的考察においても、しばしば言及される内実を含んでおり、本論において、第一章は、いわば総論的位置づけを有する論述となっている。

第二章「歴史物語と夢幻——『太平記』黄梁夢事——」は、日本における「邯鄲の夢」受容の重要なエポックとなり、謡曲『邯鄲』の典拠ともなった『太平記』巻二十六の記事を分析する。『太平記』における『枕中記』の受容については、類書や詩註などによって簡略化されて伝えられた二次的な記述を直接的な典拠とする可能性を探りつつ、それぞれの相違を考察する。その上で、『太平記』における当該叙述の研究史について、精細な追跡と批判を行い、宝剣出現と夢告を受けて提示された黄梁の夢の意味を、「夢遊物語」の文化論と往還しつつ解釈する。そして「聖人に夢なし」という言説の理解を通じて、『太平記』内の時間論と撰者の言説空間について、新たな視点で再解釈を行う。

第三章「夢中の四季の舞——舞い踊る「邯鄲」——」では、謡曲『邯鄲』を取り上げ、『太平記』との関係と距離を探り、咸陽宮の描出や『平家物語』との関係にも留意しながら、その内容と成り立ち、そして演劇としての「夢遊」の表象を分析する。その上で、この能楽作品自体の影響力を把握し、近世の歌舞伎や浄瑠璃へのアダプテーションを追う。その受容過程で、歌舞伎において女物と転じた「女盧生」の形象に着目して、その意義を

考察する。さらに、その表象を持つ浮世絵に分析を移し、豊富な絵画資料も用いながら、その影響と拡がりについて、豊富な文献資料を踏まえて論じている。

第四章「出版流通にともなう夢遊物語」は、近世の膨大な出版文化の中で「夢遊物語」の様相を分析する。まず重要作品として、林羅山『恠談』の実態について考察を行い、『南柯太守伝』とその影響作品が、同作の受容の中で、大衆にも広く読まれるようになることを指摘する。その上で『南柯太守伝』の世界のアダプテーションが、怪異小説として位置づけられて読まれていくことに注意し、「南柯の夢」の新たな変奏を論じている。一方で、近世小説の歴史的展開の中で、仮名草子『小さかづき』に描かれた「南柯の夢」とその日本の変容を追い、新資料の紹介も行う。さらに仮名草子『竹斎』の主人公・竹斎が、仮名草子『杉楊枝』の中に描かれ、その形象が謡曲『邯鄲』を踏まえていることを論じながら、竹斎像が『杉楊枝』という作品全体の構造に影響を与えていることを指摘する。さらに、続く時代の浮世草子というジャンルにおける謡曲『邯鄲』のアダプテーションの多様さと拡大について、資料紹介も行いつつ論を拡げる。

第五章「「夢遊」趣向の草双紙の五十年」は、十八世紀の文芸に焦点を移し、「邯鄲の夢」のアダプテーションとして、代表的な作品である黄表紙『金々先生栄花夢』へと論を展開する。本章では、その前史として黄表紙以前の二十年を論じ、「夢遊物語」の戯作を発掘し、通覧しつつ、『金々先生栄花夢』自体とそれ以後の作品世界を追跡し、解明するとともに、「夢遊物語」として、これまでその重要性に注目されることがなかった黒本の『初夢かんたん枕』を取り上げる。そして同作の中に、朝鮮通信使の行列から表象された異国形象があることを発見し、当時の対外意識をめぐっても論を進め、平行して、いくつかの重要な資料を紹介・翻刻しながら、近世期の「夢遊物語」の全体像に見通しを付け、本論全体を総括する「終章」へとつないでいく。

このように本論文は、日本前近代の「夢」の文化史について、東アジアの古代から近世まで、文芸・芸能・美術のアダプテーションを追いかけてながら、精緻な文献学的考察を、国際的・学際的な観点から行ったものである。その方法は、ベトナムや朝鮮半島の資料に至るまで、漢字文化圏の関連文献を広く渉猟して行われ、東アジア文化を俯瞰する視点から、日本文芸の考察へと掘り下げ、網羅的にして精緻な専門的考察を行うもので、論述は明快であり、対象とする時代や作品は多岐にわたる。スケールの大きなその研究姿勢と内容は、多様なパースペクティブへ向けて、学際的に示唆的な叙述も多い。同時にその研究は、通史的な概観に留まらず、個別の作品についても、研究の現在を問い直す、特記すべき専門性を有している。第二章の『太平記』の読解や、第五章の草双紙の論がその代表例である。

また第三章では、浮世絵の女盧生の多彩な造形が論じられるが、こうした主人公のジェンダー転換については、中国の例も一部紹介されるものの、きわめて日本的と考えられる側面を持ち、今後の考察の深まりに期待される。また「聖人に夢なし」をめぐると分析については、今後の分析によっては、日中の思想的比較論にも展開する可能性が指摘された。その他、未翻刻資料の翻刻・分析といった資料的な文献学的寄与も多い。さらに草双紙の分析の中に、当時の朝鮮通信使の行列の表象があることを発見し、そこに当時の異国観と自国意識の対照を読み解くことなども、特記すべき、国際的・学際的な研究上の達成である。

ただし、そうした達成を認めた上で、いくつかの改善点や、今後の論述展開についての指摘もあった。大きな問題としては、夢の文化をめぐって、仏教の世界観との関わりと「夢幻」などについての考察が少ないこと、また中国思想について、一部言及はあるものの『莊子』など、もっと比較対照すべき論点があるのではないかと、ということなどである。また本論のキーワードである「アダプテーション」という概念の有用性と限界についても、問いが発せられた。そして、本論では、この概念の応用が主軸の研究となっているために、中国の「夢遊物語」受容以前の日本的な夢文化の様相について、考察がもう少し必要ではないかと、との指摘もあった。

その他、たとえば重要な文学用語「やつし」について、現代の研究史をより厳密に踏まえるべき点がある、との懸念も提出された。それは、一語のターミノロジーに留まらず、本論が展開する個別の文献的追跡や情報総体について、今後さらなる深まりが必要である、という観点にも通ずる指摘である。今後の本論公刊にあたって、各章個別にそれぞれの専門知とシビアに対峙して議論を深め、より高い止揚を目指す努力がもとめられるだろう。引き続き、飽くなき考察を積み重ね、日本語、中国語、それぞれのかたちで論著を公刊し、国際的な学界へ、広く裨益する学術的活動が望まれる。

ただしそれらの課題は、申請者の今後の研究の発展における明確な方向性を示すものでもあり、本論文が、「夢遊物語」の分析を基軸に、東アジアの夢文化と文芸の交流について、画期的な飛躍をもたらす労作であることは、十分に評価できる。以上の諸点から、審査委員会一同は、全員一致で本論文を学位授与に相当するものと判定した。